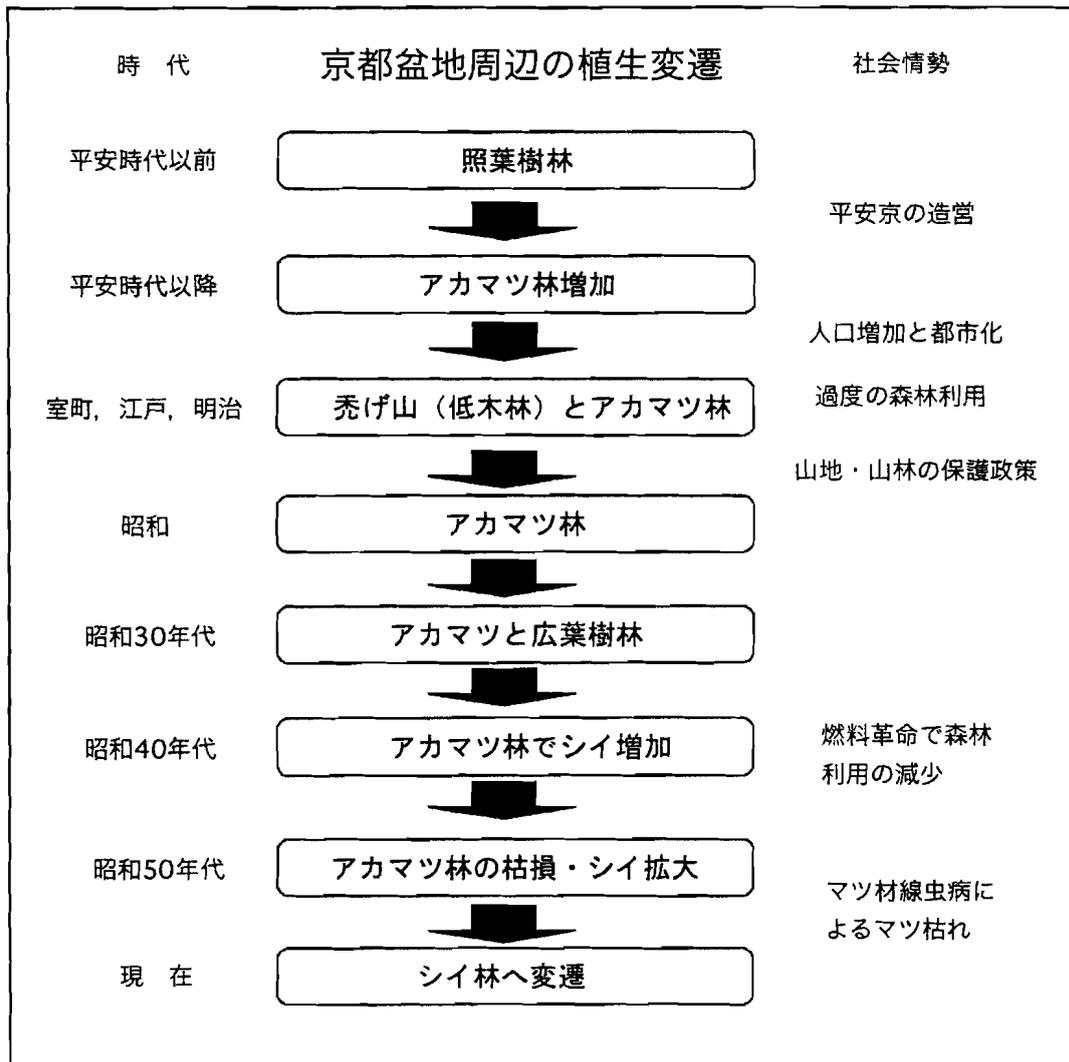


平成21年度 京都府立大学地域貢献型特別研究 (ACTR) 成果

| | | | |
|---|--|----------------------------|---|
| 分類 番号 | A 20 | 取組 名称 | 京都における歴史的景観の背景としての森林景観の移り変わりと保全 - 府下各流域における重要文化的自然的景観の保全 |
| 研究代表者: | 生命環境科学 学部 (研究科) | | 教授: 高原 光 |
| 研究担当者: | 京都府立大学 (高原 光, 田中和博, 池田武文, 松村和樹, 平山貴美子) 外部分担者・協力者 (小嶋正亮氏 (宇治市歴史資料館歴史資料係主任), 福島 幸宏 (京都府立総合資料館資料課主事) ほか) | | |
| 主な連携機関 (所在市町村、機関 (部署) 名) | 京都府立総合資料館資料課, 宇治市歴史資料館資料係, 宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課 | | |
| 【研究活動の要約】 | | | |
| <p>平安京が794年に造営されて以来, 明治維新まで千年以上にわたって都が置かれていた京都の自然景観は, 長い時間の流れの間に, 様々な社会の状況に応じて, 大きく変貌してきた。その中でも特に, 平成21年度に都市部では初めて国の重要文化的景観に選定された宇治橋を中心とする宇治川周辺について, 堆積物の分析, 絵図, 古写真, 空中写真などの解析によって, 1200年間の植生景観の変遷を明らかにした。平等院創建前には, カシ類を中心とする照葉樹林であったが, 10世紀にはアカマツ林へと大きく植生景観が変化した。江戸末期まで, マツ類と低木林を中心とする植生であった。1960年台の燃料革命以降, 常緑広葉樹のシイが増加したが, 松食い虫 (マツ材線虫病) の蔓延によって, さらに, シイ林が拡大し, 現在の宇治橋周辺の植生景観が形成された。このように植生景観の変化は, 時代ごとの資源利用方法や自然環境の変化と密接に関係していた。</p> | | | |
| 【研究活動の成果】 | | | |
| <p>1. 平等院阿字池の堆積物を採取し, 花粉分析, 放射性炭素年代測定, 植物珪酸体分析を行った結果, 平等院創建以前の8世紀頃の平等院周辺には, カシ類を中心とする常緑広葉樹林 (照葉樹林) が優占し, スギ, ヒノキ科, モミ, エノキ, ムクノキなどが伴っていた。また, 阿字池のある場所では, イネの栽培が行われていたことが明らかになった。10世紀以降には, マツが優占する森林へと大きく変化した。このように, 平安時代初期にはカシなどの照葉樹林であったが, 10世紀以降にはマツ林が拡大した。</p> <p>2. 京都府立総合資料館が所蔵する「四百年前社寺建物取調書」(1882年) などの絵図, 宇治市歴史資料館が所蔵する「宇治川兩岸一覽」(1863年) また同資料館が収集している過去の宇治川周辺の写真の解析から, 現在シイ林に覆われている宇治上神社, 興聖寺の上部は, 高木のない状況であった。さらに, 宇治川周辺の昭和初期の古写真から, マツ林もしくは低木林が優占する様子が認められた。このように, 昭和初期まではマツ林あるいは低木状の植生が広く認められた。</p> <p>3. 1961年と2006年の空中写真を用いて, 植生分布を解析した結果, 1961年には, アカマツが優勢な森林あるいはマツを混生する落葉広葉樹林であったが, 2006年には宇治川にかかる宇治橋南東に位置する宇治上神社, 興聖寺周辺を中心にシイを中心とする常緑広葉樹林が広がっていた。</p> | | | |
| 【研究成果の還元】 | | | |
| <p>平成21年11月22日 京都府立植物園講演会「京都盆地周辺の森の移り変わり～深泥池の研究から～」 (府民対象)</p> <p>平成21年12月8日 京都Sky大学講義「移りゆく京の森のすがた」 (府民対象)</p> <p>平成22年3月25日 京都伝統文化の森推進協議会 講習会「移りゆく京の森のすがた」 (行政担当者対象)</p> | | | |
| 【お問い合わせ先】 生命環境学研究科 森林植生学研究室 教授: 高原 光 | | | |
| Tel: 075-703-5683 | | E-mail: takahara@kpu.ac.jp | |

参考（イメージ図、活動写真等）



京都盆地周辺の植生変遷